21a-10

男女大学生における個室の領域化とその利用

名古屋文理短期大学　　小俣　謙二

目的　なわばり空間の確立ないしは空間の領域化が居住者の行動や心理、人格形成に影響を及ぼす可能性がしばしば指摘されている。現代住宅ではなわばり性は主に個室において現れるが、同時に個室の領域化の程度には個人差や性差が存在する。本研究は個室の領域化の違いがそこでの行動や個室観、心理的自律性とどのように関連するかを、自我の形成時にある大学生を用いて調べたものである。

方法　被調査者には大学１・２年（平均年齢19.3）の男女大学生430名（男205、女225）を用いた。方法は質問紙調査法を用い、質問紙は個人属性、家族属性、個室の領域化の程度（3尺度）、日常場面（10事態）での部屋の利用、個室についての考え方、心理的自律性などの質問項目で構成されている。

結果　以下の所見が得られた。1)領域化の尺度である排他性、部屋への愛着度、部屋の自己表現度は、従来考えられていたような単一概念ではまとめられず、排他性と他の二尺度（まとめて満足度としておく）の二つの独立した概念にわけられる。2)部屋の排他性は男女とも低く性差はない。3)満足度は男性の方が高い。4)男子は部屋の心理的機能面に着目するのに対して、女子は物理的側面を重視する。5)領域化の程度による部屋の使用の違いは男性で顕著であり、かつ、情動事態で顕著である。6)男女とも満足度の高い学生ほど心理的自律性は高い。

結論　本研究の結果は空間の領域化が確定されるにつれ、部屋のshelter機能が強まり、自我の確立に肯定的な影響を及ぼす可能性を示していると考えられる。